

# 地代理論の歴史に於けるマルサスの地位

——リカードの地代理論との比較研究——

高橋次郎

## 目次

### 緒論

I、私の意圖

II、當時の經濟的社會狀態

### 理論

A、地代理論の研究課題

B、地代の定義

C、地代の發生

D、地代と價格形成

E、地代の増減

地代理論の歴史に於けるマルサスの地位

立場

F、地代に對する觀念

政策

G、マルサスの保護貿易政策

H、リカードの自由貿易政策

結論

I、結論的説述

## 緒論

### I、私の意圖

マルサスと言へば人口論、リカードと謂へば地代論を想ひ出す。それ程リカードの地代論は著名である。然し、マルサスは嘗に人口論のみならず地代理論に於ても卓越せる學者であつたのである。彼が一八一五年に公刊した“An Inquiry into the Nature and Progress of Rent.”は、實際「小さいものではあるが、極めて内容の豊富なる著作<sup>(1)</sup>」であつて、その小冊子の中に於ける彼の地代理論は略々リカードのそれと同一の内容を具備して居る。それにも不拘、マルサスの地代理論は、リ

カードの地代理論てふ偉大なる光に全く蔽はれて、甚しく閑却せられて來た。此の不運なるマルサスの地代理論を明るみに出す事は尠なからぬ意義のある事であつて、既にレーザの如きはマルサスを以て近代的地代理論の發見者と目して居るのである。

本稿に於て、私はマルサスとリカードの地代理論を比較研究するのを主眼とする。従て、地代理論に關する『先蹤論争』の全體を取扱ふ事は本稿の範圍外に出づるものであつて、それは他日を期して行ふ事とし、茲では専らマルサスとリカードの二人のみに局限して論ずるに止める。又、私は右兩者の地代に關する論說の中でも主として理論的部分に力を注ぎ、その關係を明かに認識せんと欲するものであるから、勢ひその他の部分即ち地代に對する觀念及び政策は簡單にしかも附隨的意味を以て述べるに過ぎない。

斯かる意圖を遂行せんとするに際して計らずも想ひ出したのは『人間を混亂に陥れるものは事物ではなく、事物に關する見解である』と言ふギリシヤの古諺である。そして、マルサスとリカードの地代論を比較研究するために採つた私の方法は、實に、直接に彼等自身の言葉に耳を傾ける事であつた。斯かる目的のために供したのは、次の如き諸書である。

Malthus, An Inquiry into the Nature and Progress of Rent, and the Principles by which it is regulated. 1815.

- do., The Grounds of an Opinion on the Policy of Restricting the Importation of Foreign Corn. 1815.
- do., Observations on the Effects of the Corn Laws, and of a Rise or Fall in the Price of Corn on the Agriculture and the general Wealth of the Country. 1814.
- do., Principles of Political Economy. 1820.
- Ricardo, Principles of Political Economy and Taxation. (1 ed. 1817)
- do., An Essay on the Influence of a Low Price of Corn on the Profits of Stock. 1815. (Economic Essays by David Ricardo, edited by Gonner. 1923.)
- do., On Protection to Agriculture. 1822. (Economic Essays by D. Ricardo. 1923.)

斯くて、本論に於て展開するが如き結果に到達する後、『事物に關する見解』——それは行論中に引用せられたる諸書を意味する——へと眼を轉じ、色々な意味に於て啓發せられる點のあつた事を、それらの諸々の著者に對して感謝する。

## II、當時の經濟的社會狀態

マルサスが穀物關稅擁護の目的を以て『地代の性質及び増進に關する研究』を公表したのは、「最も有効であると思はれる時期」に於てであつた。

其の當時、英國は既に世界一の富強國となつて居た。外には東洋及び植民地の販路を掌握し、内

には諸發明を利用して大工業の經營が行はれ、金融及び貿易は大發展を來し、有力なる商人、工業家及び銀行家が活躍して居た。然るに他方、英國の貴族は封建的遺風を留めて大地主となつて、議會に於て多數を占めて權力を握つて居たので、憲法政治とは名のみにて實は地主の貴族政治に外ならなかつた。夫故に、政治的地位を得んとするものは、競つて土地の兼併を行つた。その結果農民は所有地を買收せられ且つ入會權を喪失したから、彼等は單なる労働者となつて大農に雇はれる外に途がなかつた。けれども新農法は労働を節約し、農業労働者に對する需要を減じたから、農村の過剩労働者は漸次工場及び炭坑労働者へと變つて行つた。

一八一五年前後に於て、機械及び新しい技術的生産方法に對する労働者の叛亂即ち『ラダイト運動』が工業地に現はれたけれども、未だ勞資對立の尖鋭化を見る迄には發展せず、その當時は尙新興資本家階級と封建的地主階級とが社會の前景に於て相對立して居たのである。

當時、英國はナポレオン戰爭の結果、財政逼迫し、加ふるに穀價が騰貴して居た。マルサスの記する所によると、次の如くである。

一七九二年

四二志（一クチャーター）

一七九六年

七七志

一八〇一年

一一八志

一八〇三年

五六志

價格は一七九二年から一八〇一年に至る間に殆んど三倍に騰貴し、一七九八年から一八〇一年に至る短期間に五〇志から一一八志に騰貴し、更に五六志に下落した<sup>(2)</sup>。而て、「一八一二年には再び一二二志八片の最高平均を示して居る<sup>(3)</sup>」と言ふ風に、その暴騰が甚しかつた。然るに「労働者は、斯かる高價に對する一部の補償にも與らずして、最も多くの場合に於て、戦前に支拂はれたと同様又はそれに近い賃銀を獲得するため、仕事にありつかんとして頻りに競争した<sup>(4)</sup>。」その結果、「飢餓は刻々に迫りつゝあつたのみならず、實際に起り<sup>(5)</sup>、」到る處に『米騒動』が勃發した。斯かる困窮の秋に方り、地代は法外に騰貴し、「一七九〇年と一八三〇年との間に於て、ポータに從へば、それは少くとも倍加され<sup>(6)</sup>、」地主階級は前例のない程その收入を増加した。一例を擧げると、佛蘭西革命戦争直前に一英町十志以下のものが、此の戦争中に急騰して四五志乃至五〇志で貸付せられたのである。

實に、斯かる經濟状態を背景として、穀物關稅論争は火花を散らした。此の論争が端を開いたのは、一八一三年五月一日を以て發表せられた下院特別委員會の穀物貿易に關する報告書、並びに同年六月一五日のサー・ヘンリー・バネルの現行穀物條例改正の必要を述べた演説である。一八

一三年當時現行の穀物條例、即ちジョージ三世在世四四年法令第一〇九號(4 Geo. III. Chap. 109)は、一八〇四年の下落を救済するために改正されたものであつて、一八一五年に入つてから、此の條例を中心として、リカードとマルサスとの間にも論争が行はるる事となつたのである。

勿論、マルサスは最初その“*Inquiry*”を公刊した時には、ブカナンを直接の論敵として、地代排斥論・地主放逐論に對して地代を辯護し地主を擁護するために、ブカナンの地代獨占論に對しては非獨占論、地代有害論に對しては有益論を主張したものであるが、此のマルサスの“*Inquiry*”並びに“*Grounds of an Opinion*”に對してリカードは論駁の一書“*Influence of Low Price*”を著し、茲に兩者の間に政策上の論争がその端を開く事となつたのである。

私は、以上の如き極めて簡單なる一瞥をその當時の經濟的社會状態に與へるに止めて、直ちに本論に入る事とする。

- (1) Leser, Untersuchungen z. Geschichte d. N. Ö. S. 92.
- (2) Malthus, *Grounds of an Opinion*, p. 27.
- (3) Porter, *Progress of Nation*, p. 158.
- (4) *ibid.*, p. 470.
- (5) Price, *A Short History of Pol. Economy in England*, p. 41

(6) Toynbee, *Industrial Revolution*, p. 72.

## 理 論

### (A) 地代理論の研究課題

地代理論として取扱はんとした問題は、マルサスにもリカードにも共通のものであるから、私の比較研究にとつては極めて好都合である。マルサスの著書には『地代の性質及び増進、並びに地代の決定される諸法則に關する研究』と云ふ表題が附いて居る。之に對して、リカードも「地代の性質及びそれによつて地代の騰落が左右される所の法則の研究<sup>(1)</sup>」をなさんとして居る。斯くて、兩者は共に、地代を定義することによつてその性質を明かにし、更に進んで地代發生の原因を探究し、その増減を支配する法則の研究に入つて、その理論を鮮明ならしめんとして居る點に於ては、全く一致して居るのである。

### (B) 地代の定義

マルサスは、「土地の地代とは、その當時に於ける農業資財の利潤の通常率によつて評價された

所の投下資本の利潤をも包含して、その種類の何たるを問はず耕作に屬する凡ての出費が、全生産物の價值の中から支拂はれた後に、土地の所有者に残る所のその部分であると定義する事が出来る<sup>(2)</sup>。」と云ふ。之に對してリカードは、その著『穀物の低い價格が資財の利潤に及ぼす影響』の卷頭に於て、マルサスの定義を其儘引用して、「マルサスは極めて適切に地代を定義して居る<sup>(3)</sup>」と附言して、全く同意を表して居るのである。而て、『原論』に於ても尙此定義は維持せられ、「地代は常に二つの同一分量の資本及び労働の使用によつて得られた生産物間の産額である<sup>(4)</sup>」と述べられてある。即ち、土地の全生産物の價值の中から、一切の生産出費を控除した後に、地主の手に残る部分が地代である。

「乍然、それは屢資本の利子及び利潤と混同せられ……通俗的の言葉に於ては、年々百姓によつて彼の地主に支拂はれる所のものには何にでも適用されて居る<sup>(5)</sup>」けれども、「地代を左右する法則は、利潤の過程を左右する所のものとは非常に異つて居る<sup>(6)</sup>」から、兩者は嚴密に區別せられなければならぬものである。されば、リカードは「地代は土地の生産物の一部であつて、それは土壤の本源的な而て不可壞的な力の使用に對して、地主に支拂はるゝ所のものである<sup>(7)</sup>。」と定義して、地代即ち「耕作に用ひられた資本の利潤及び労働の賃銀を支拂ふに必要なもの以上の價格の超

過<sup>(8)</sup>」は自然の力の使用に對して支拂はれる所の報酬である事を明かに示した。

之に對して、マルサスは「若しも、資財の一般的利潤が二十%であり、土地の特別な部分が、使用された資財に對して三十%を擧げるならば、何人が受取るにせよ、三十%の中の十%は明かに地代である<sup>(9)</sup>。」と述べて、利潤と地代との區別を明かにして居るのみならず、又、地代は「土壤の本源的な而て不可壞的な力の使用」に對して支拂はれるとなすリカードの説に對應して、それは「神の賜物<sup>(10)</sup>」たる「或る性質を有する土地の上の定着物として<sup>(11)</sup>」生ずるものと觀念して居るのである。マルサスは此點に於て「自然的秩序の知識は人を導いて神に到らしめ、神より人に與へられたる法則の善良巧妙なるを認めしむべき旨を繰返して倦む所なかりし<sup>(12)</sup>」フイデオクラットの影響を受けて居り、且つ彼が牧師で在つた事があつたと言ふ事によつて、斯くの如く其の所論には幾分宗教的色彩が残存して居る。乍然、『神の恩惠』も現實世界に在つては具體的な『土壤の性質<sup>(13)</sup>』として其の姿を顯現するものであり、只土壤は神の恩惠によつて餘剰生産物を生産する性質を賦與せられるに過ぎないものであると言ふ事を認めたマルサスは、「地代を生ずる所の斯かる土地の力は、確かにその豊饒性に比例して居る<sup>(14)</sup>」と説明して居るのである。

兩者の考は、之を純粹に理論的に觀察すると、結局、地代は『土地の力』に負ふものであると言

ふ事に歸着するの外はなすのである。

- (1) Ricardo, Principles of Political Economy and Taxation. p. 44.
- (2) Malthus, An Inquiry into the Nature and Progress of Rent. P. 2. do., Principles of Pol. Economy. p. 134.
- (3) Ricardo's Economic Essays. p. 225.
- (4) Ricardo, Principles, p. 48.
- (5) ~~(5)~~ ibid., p. 44.
- (6) ibid., p. 45
- (8) Malthus, Principles, p. 134.
- (9) do., Inquiry, pp. 18—19.
- (10) ibid., p. 8.
- (11) Malthus, Principles, p. 155.
- (12) 大西猪之介「囚はれたる經濟學」p. 21.
- (13) Malthus, Inquiry, p. 8.
- (14) do., Principles, p. 140.

### (C) 地代の發生

マルサスは、地代の發生に就いて、次の様に述べて居る。

地代理論の歴史に於けるマルサスの地位

「地代の直接の原因は、明かに粗生々産物の市場に於ける賣價が生産費以上に超過する事である。従つて、此の研究に對して第一に現はれる對象は、粗生々産物の高い價格の一或は多くの原因である(1)。」

「粗生々産物の高い價格の諸原因は三個であると言ふ事が出来るであらう。

第一に、且つ主として、土地の上に使用された人々を維持するに要するよりも一層大なる生活必需品を産出し得る土壤の性質。

第二に、自らその需要を創造し、若くは生産された必需品の分量に比例して需要者の人數を増加する事の出来る生活必需品の特性。

而て、第三に、最も肥沃なる土地の比較的稀少なる事(2)。」

此の命題を、彼の地代發生に關する他の説明の全體と相對照して「極めて注意深く且つ繰り返して熟讀した後(3)。」私は次の主張に到達せざるを得なかつた。

先づ、粗生々産物の高價なる原因の第一としてマルサスの擧げたものに關して述べると、既に地代は全生産物の價值の中から生産費を控除した後に地主の手許に残る超費餘剰から成るものであると觀念せられて居るのであるから、地代が發生するためには土地には必然的に「土地の上に使役せ

られた耕作者を維持するよりも一層大なる生活必需品を産出し得る土壤の性質」が無ければならぬのは當然である。是は最も原始的な耕作條件であつて、斯様な考は、「地代は常に二個の同一分量の資本及び労働の使用によつて得られた生産物間の差額である」と定義するリカードに於ても亦、勿論自明の理として暗黙の中に其の前提をなして居る事は、否定し得ない事實である。然し、是は今更とり立てゝ説明する必要のない平凡なる一前提たるに止まるが故に、此の事に就て口を緘して居たりカードの方が賢明であると言はねばならぬであらう。

第二の原因に關しては、それは彼の人口論と關聯するものであつて、マルサスが、生活必需品は自らその需要を創造して人口を増殖せしむる事が出来ると主張するに反して、リカードは「人口の増進に伴れて、その食物の供給を多くする事が出来る様に、より劣等なる土地を採用すべく餘儀なくせられる(4)」と論じて居る。人口と食物との間の斯かる相關々係に於て、何れが因であり何れが果であるかと言ふ事に就いては之を人口論の領域に譲る事とするが、何れにしても、兩者俱に人口論との關聯に於て地代論を取扱つたと言ふ點に於ては、その軌を一にするものであると言ふ事が出来る。然し、是も亦單なる前提たるに止まり、原因の名を要求すべき性質のものではない。

此の第一及び第二の原因、即ちマルサスの謂ふ所の『第一次的原因(5)』は、「人間に授けられたる

神の恩惠」であつて、地代の存在にとつて「絶對的に本質的なもの<sup>(6)</sup>」である。従て、「若しもそれがなければ、如何なる程度の稀少性も……地代を生ずる事を得ないであらう<sup>(6)</sup>」とマルサスは言ふ。又、彼は「粗生々産物の高價の……重なる原因は、明かに生活必需品を生産する所の土地の豊饒性である<sup>(7)</sup>」と説く。此の二個の命題は文字上では相矛盾するが如くである。然し、文字に囚はれずに彼の所論の全體を深く検討するならば、マルサスの理論の眞意が奈邊に存するかは判断に難くない。彼が呼んで『第一次的原因』と爲す所のものは、實は前提を示すに外ならない。それが地代の存在にとつて本質的なものであつて、若しもそれを欠くならば如何なる程度の稀少性も地代を生ぜしむる事が出来ないと云ふ事、及びそれが『神の恩惠』と稱せられる事、——これ等の事はマルサスの『第一次的原因』なるものは實は前提を意味するに過ぎないと言ふ事の證據として役立つものである。而て、此の前提は『神の賜物』として『最も肥沃なる土地の比較的稀少なる事』と言ふ眞の原因の中に其の姿を潜めるのである。即ち、「地代は神が人間に與へた所の土壤の最も貴重なる性質の指示である<sup>(8)</sup>。」とマルサスは説く。

斯くの如くにして、『第一次的原因』は眞の原因たる「最も肥沃なる土地の比較的稀少なる事」の前提と見るのが至當であり、マルサス自身も實際その説明を行ふに際しては、此の第三原因

を目して「重なる原因(9)」と爲して居るのである。斯くて、地代の發生を説明せんがためには、マルサスに於ては第三の原因のみが重要性を有するものと言はなければならぬのである。

次に眞の原因と認むべき第三の原因の考察へと進む。それは、「最も肥沃なる土地の比較的稀少なること」である。而て、「土壤の豊饒性及び土地の或る分量からの生産物の必從的豊富は(10)」地代の「特殊的原因(11)」である。即ちマルサスは、最も肥沃なる土地には限度があり、それは比較的稀少であるから、耕作せられた中で相對的に肥沃なる土地——即ち『耕境』以上の土地の豊饒性が地代を發生せしむるものであると言ふ事を説明して居るのである。

リカードに従ふと、「地代が、常にその使用に對して支拂はれるのは、とりも直さず、土地が分量に於て無限でなく且つ地質に於て一樣でないから……である(12)。」用語こそ異なれ、之は全くマルサスと同一の考を表現したものである事に疑はない。リカードは土地の稀少性が、地代發生の原因であると力説するけれども、稀少性によつて生ずる地代は必ず『耕境』以上の相對的豊饒性を有する土地の上に於てある。それ故に、地代は肥沃なる土地の稀少なるが故に生ずると言ふべきである。それを、リカードは稀少性に重きを置き、マルサスは豊饒性に重點を置いて説明して居るのである。加之、マルサスも第三の原因として稀少性を説いて居るのであるから、實質上兩者の見解に

は何等の差異も存しない、と言はなければならぬのである。

斯くて、マルサスに於ては幾分不明瞭なる表現を得て居たものが、リカードの手を通る事によつて、マルサスの所謂『第一次的原因』即ち前提たるべき事柄は除外せられて、以前より明瞭に且つ單一に書き改められた事は確かであるが、それは決してリカードに於ても完全無缺とは言ひ得ない。吾々は、彼等の學說の中に今日から見ても尙且つ完全無缺なる眞理を見出さうと欲するものではない。吾々の爲すべき事は、現代の學說の核心を形成して居る契機モメントの關聯に眼を注ぐ事である。リカードがマルサスを止揚アウフヘーベンして居ると觀るのは正しいにしても、斯かる止揚は、決して單なる無視又は排斥ではなく、却てリカードの新なる説明がマルサスの古い理論の辯證法的發展の産物である事を意味するものである。即ち後者が前者の中に契機モメントとして君臨して居るのである。斯かる契機關聯の立場から見ると、マルサスの理論の中には、既に明白なる形態をとつて、近代的差益地代論を形成する所の契機モメントが、aufgehobenes Moment として、存在して居るを事を看遁す譯には行かないのである。

x x

従つて、地代發生の經過の説明に於ても本質的に異なる所の何物をも見出すことが出来ない。

マルサスは、地代發生の經過を次の様に説明して居る――

「社會の初期、即ちもつとはつきり言ふと、多分舊社會の知識と資本とが、新しい豊饒地の上に用ひられる時に於ては、此の餘剰生産物即ち神の澤山なる賜物は、著しく高い利潤と著しく高い賃銀として現はれ、地代の形式としては殆んどあらはれない。豊饒地が充分であつて、土地を乞ふ者は誰でも土地を持つ事の出来る場合には、地主に對して地代を支拂ふ者のない事は勿論である。しかしながら、斯かる状態が繼續する事は、自然の法則及び地球の制限・性質と相容れないものである。何れの國に於ても、必ず土壤及び位置の様々な種類が存在するに相違ない。凡ての土地が、最も豊饒であると言ふ事はあり得ない。又、凡ての位置が、航行可能の河川或ひは市場に最も近接して居る事はあり得ない。然し乍ら、最も自然的豊饒性に富み位置上の最大便益を有する土地に使用せられる資本より以上の資本の蓄積は、必ず利潤を低下せしめなければならぬ。一方、生活資料以上に増加する人口の傾向は、一定の時を經過したならば、労働の賃銀を低下せしめなければならぬ。

生産出費は斯くして減少する。然し生産物の價值、即ち労働の分量並びに價值が支配し得る所の

穀物以外の他の労働の生産物の分量は減少させられる代りに増加されるであらう。そして、生活資料を要求し、且つ彼等の勤勞が役立つ方面なら如何なる方面にでもそれを喜んで提供する人々の數が増加するであらう。それ故に、食物の交換價値は、その當時に於ける實際の利率に従ふ所の土地に投ぜられた資本の充分なる利潤をも含む所の生産費を超過するに至るであらう。そして此の超過が即ち地代である<sup>(13)</sup>。斯くして、「その國の富と人口とを自然的に増加するに従つて、豊饒なる地域が比較的稀少となるがために、利潤と賃銀とが下落し初めるや否や、地代は利潤から分離し始める事がわかつた<sup>(14)</sup>」のである。

リカードも亦同様な事を述べて居る。

「或る國に始めて植民した際に、その國內に豊饒肥沃なる土地が豊富にあり、實際の人口を維持するには唯その極少部分の耕作を必要とするか、或は更にその部分の土地は人々の自由になし得る所の資本を以て耕作し得る時には、茲にはまだ地代はないであらう<sup>(15)</sup>。」「社會の進歩に伴ひ、第二位の肥沃度の土地が耕作さるゝに至る時は、地代は直ちに第一等の地質の土地に發生し始める。而てその地代の量は、此等二つの部分の土地の地質に於ける差異如何に依存するであらう。第三等の地質の土地が耕作せらるゝに至る時は、地代は直ちに第二等地に發生し始め、而てそれは前の様に

彼等の生産力に於ける差異によつて左右される。同時に、第一等地の地代は騰貴するであらう。何となれば、それは常に第二等地の地代よりも、此等二個の土地が與へられた分量の資本及び労働を以つて生産する所の生産物間の差だけ、より多くなければならないから。人口の増進は一國をして、その食物の供給を多くする事を得せしむるがために、より劣等なる土地を採用する事を餘儀なくせしむるに至るであらうが、これある度毎に地代は總てのより肥沃なる土地に於いて騰貴するであらう<sup>(16)</sup>。」

斯くの如くにして、兩者は共に收穫遞減の法則を認識し、しかもその法則の作用をうけて地代は稀少性を有する所の土地の生産力の差異即ち相對的肥沃度の差異によつて相對的優良地に對して發生すると云ふ差益地代の觀念に到達して居ると云ふ點に於ては、正に一致して居るのである。

- (1) Malthus, Inquiry, p. 2.
- (2) *ibid.*, p. 8.
- (3) *ibid.*, p. 2.
- (4) Ricardo, Principles, p. 47.
- (5) Malthus, Inquiry, p. 8.
- (6) *ibid.*, p. 9.

- (7) *ibid.*, p. 13.
- (8) *ibid.*, p. 16.
- (9) *ibid.*, p. 13.
- (10) *ibid.*, p. 15.
- (11) *ibid.*, p. 15.
- (12) Ricardo, *Principles*, p. 47.
- (13) Malthus, *Inquiry*, pp. 17—18.
- (14) *ibid.*, p. 21.
- (15) Ricardo, *Principles*, p. 46.
- (16) *ibid.*, p. 47.

#### (D) 地代と價格形成

斯くの如くにして發生する差益地代は價格と如何なる關係に立つかと云ふ事が、次の課題となつて現はれて來る。

先づ、生産物の價格は如何にして決定せられるか？との問に對して、マルサスは答へる。「凡ての進歩的國家にあつては、生産物の價格は、實際上使用せられて居る最も貧弱な地質の土地に於ける生産費、又は殆んど或は全く地代を伴はない農業資財の通常の報酬のみを擧げる所の古い土地に

於て附加的生産物を收むる費用、と等しくしなければならぬ(1)」と。

リカードも此の考を其儘繼承して、「凡ての貨物の交換價値は、常に、極めて好都合である。即ち、最も不利なる事情の下に於てそれらのものを生産し續ける人々によつて、その生産に必然的に費されたるより多量の労働によつて左右されるのである。最も不利なる事情とは、その下に於て、要求された生産物の分量が、生産を繼續する事を必要とする所の、最も不利なる事情を意味する(2)。」と述べて、耕境に於ける生産費が「同質の穀物には二個の價格が存在し得ない(3)」と云ふ一物一價の法則(無差別の法則)に依つて、凡ての同質の生産物の「必要價格(4)」を決定すると云ふ「最も重要なる眞理(5)」を説明して居る。

斯くの如くにして、「進歩的國家に於ける穀物は、實際の供給を擧げるのに必要なる價格で賣られ、且つ此の供給が益々困難となるに伴れて、價格も之に比例して上騰する(6)。」その結果として、耕境以上の比較的優良地は「その優良性に比例して地代を齎らさなければならぬ(7)」のである。夫故に、耕境に於ける生産物の價格はその生産費と相等しいものであるから、「貧弱なる土地は……何等の地代をも齎らし得ない(8)」事となる。茲に、彼等の地代論の特徴が獨占地代論ではなく差益地代論たるに在る事の明かなる證據がある。

マルサスに依ると、生産物の價格を決定するものは耕境に於ける生産費、詳しく云ふと賃銀と利潤とであるから、當然の歸結として地代は價格の決定に参加する事を拒まれて居るもので、此點に關しては何等の疑もさしはさみ得ないのである。「此事を明かに了解する事は、經濟學にとつて最も重要な事である(9)。」と信ずるリカードは、巧みに此の間の消息を傳へて、「地代が支拂はれるから穀物が高いのではなくて、穀物が高いから地代が支拂はれるのである(10)。」故に「地代は毫もその價格の一構成部分として入り込まないし、又入り込むことが出來ない(11)。」と述べて居る。斯くて、此の點に關しても、リカードとマルサスとの間に異見を見得ないのである。

- (1) Malthus, Inquiry, pp. 35—36. Principles, p. 183.
- (2) Ricardo, Principles, p. 50.
- (3) Malthus, Inquiry, p. 38.
- (4) *ibid.*, p. 39.
- (5) *ibid.*, p. 41.
- (6) *ibid.*, p. 21.
- (7) Ricardo, Principles, p. 55note.
- (8) *ibid.*, pp. 51—52
- (9) *ibid.*, p. 55.

### (E) 地代の増減

以上述べ來つた所によつて、吾々は、土地の生産物の價格(P)は凡て、耕境に於ける生産費(C)によつて決定せられ、相對的優良地は自己の生産費(S)と生産物の價格(P)との差益として地代(R)を發生せしむると云ふ理論、即ち、

$$P = C$$

$$C > S$$

$$P - S = R.$$

と云ふ事に關しては、マルサスとリカードと全く意見を同じうして居る事を論證した。

而て、地代の増減は全くPとSの間の開き如何に依存するものであるから、差益地代の本質上、

$$P = K \text{ (マルサスの假定した場合)}$$

$$P - S_{-n} = R_{+n}$$

$$P - S_{+n} = R_{-n}$$

$$S = K \text{ (リカードの假定した場合)}$$

$$P_{+n} - S = R_{+n}$$

$$P_{-n} - S = R_{-n}$$

(但し、 $S_{+n}$ ,  $R_{+n}$ ,  $P_{+n}$  は各、 $S$ ,  $R$ ,  $P$  増加を示し、 $-n$  は減少を示す。)

となる事は、固より當然の事である。

先づマルサスが地代の増加に就いて詳細に説明して居る所に耳を傾ける。「より貧弱なる土地或は一層市場を遠去る所の土地は、最初は何等の地代を擧げないにしても、利潤をも含む耕作の出費が低落すれば、充分に之等の出費を償ひ、耕作者に何等の損失をも蒙らしめない。而てまた資財の利潤或は労働の賃銀の一方、或は此の兩方が更に低落したならば、更に貧弱なる土地或は一層地の利を得ざる土地も耕作せらるゝに至るかも知れない。而て、之等の各階段に於て、若しも生産物の價格が低落しなければ、地代の上騰する事は明瞭である(1)。」此の際、生産出費を減少せしむる原因は、「第一に、利潤を低下せしむるが如き資本の蓄積、第二に、賃銀を低下せしむるが如き人口の増加、第三に一定の結果を産出するに必要な労働者の數を減少するが如き農業上の改良若くは勤勞の増加、及び、第四に、生産出費を名目上低下せしむる事のない様な、需要の増加による農業生産物の價格の騰貴(2)。」である。「上述の四原因の作用によつて、生産物の價格と生産手段の費用と

の差額が増加する時には、常に地代が騰貴するであらう。されど、之等四個の原因がすべて同時に作用する事は、必ずしも必要ではない。ただ、此處に述べた差額が増加しさへすれば足りる(3)。「然らば、一般的眞理として、地代は生産物の價格と生産手段の費用との間の差額が増加するに従つて、當然上騰するものと云ひ得るであらう(4)。」

此の説明に於て、マルサスは「若しも各階段に於て生産物の價格が下落しなければ」と云ふ事 ( $P \parallel K$ ) を前提として論じて居るのであるから、耕作の出費を減ずる事 ( $S_{-H}$ ) が、地代を増加せしむる事となる。即ち、

$$P - S_{-H} = R_{+H}$$

而て、マルサスはその生産出費を減ずる原因を四つに分けて細論して居る。既に述べた様に、彼は賃銀と利潤とが生産出費を構成するとなすものであるから、第一・第二の原因が出費を減ずる事は、何等の説明をも要しない。第三の原因は必要労働者の數を減ずるものであるから、他の事情にして等しき限り、賃銀總額従つて生産出費を減少せしむる事となる。第四の原因は、例へばマルサス自身が説明して居る様に、「或る特定國の粗生々産物に對して、四圍の國民の間に一大繼續的需要が起るならば、此の生産物の價格は固より著しく騰貴するであらう。而て耕作の出費は唯緩徐に

同じ比例で上騰するから、生産物の價格は永い間著しく先に進み、改良に對して著しい刺激を與へ、新しい土地を開墾するために多くの資本を用ふる事を奨勵し、由來の土地をして一層生産的ならしむるに至る(5) 場合である。是は勿論實質的には生産出費を感じたと同じ結果になるのであるが故に、出費を減ずる原因の第四のものとなしたのであらうが、價格を一定と假定して居る (P=K) 第一・二・三の原因と一緒にして考察する事は少し無理を伴ふとも考へられる。しかし、何れにしても實質的には出費を減ずると同じ作用をあらはすものであるから、地代を増加せしむる事には少しの變りもない。即ち、マルサスは、 $R_{+n}$  なる時には、 $S$  を減ずれば減ずる程即ち  $S_{-n}$  の  $n$  が大となればなる程、 $R$  が増大する事即ち  $R_{+n}$  の  $n$  が大となる事を、説明して居るのである。

之に對應してリカードは曰ふ、「地代の騰貴は、國の富の増加しつゝある結果であり、又その結果された人口に對して食物を供給する事の困難なる結果である(6)。」と。又曰く「地代は自由になし得る土地が、その生産力に於て減退する時に、最も迅速に増加する(7)。」即ち、「より少くない生産上の報酬を以て地上に使用する事が必要となつて來る所の附加的資本のその部分が加はる毎に、地代は上騰するであらう(8)。」と。リカードの意味する所は、 $U_{+n}$  と假定する場合に於て、 $C$  の増加、従つて  $P$  の騰貴によつて、 $R$  の上騰が惹き起されると云ふ事である。即ち、

$$C_{+n} = P_{+n} \quad P_{+n} - S = R_{+n}$$

である。リカードによると、「人口はそれを雇傭する爲の資金によつてそれ自らを調節する。それ故に常に資本の増減と共に増減する<sup>(9)</sup>」ものであるから、資本の蓄積は必然的に人口従て有効需要を増加せしめる。此の需要を満す爲に、社會はより劣等なる土地を耕すべく餘儀なくせられ、 $S \parallel K$ なるにも不拘、耕境に於ける生産出費(C)が益々増大して行く。而て $C \parallel P$ なるが故に、價格を騰貴せしむる事となる( $P_{+n}$ )。その結果、 $P_{+n}$ とSとの開きが益々大となり、「資本の蓄積は地代を騰貴せしむる<sup>(10)</sup>」事となるのである。

斯くの如く、地代の増大なる同一現象を説明する爲に、マルサスは $C \parallel S$ と假定としてSの減少を取扱ひ、リカードは $S \parallel K$ と假定して、Pの騰貴を問題とした。そして、兩者はその條件の固定に於て反對側に立つて居るとは云へ、結局目指す所はPとSとの間の開きの増大によつてRが増大すると云ふ一事を論證するに在ると云ふ點に於ては、何等異なる所がない。

地代の下落なる現象も、その増加の場合と同様なる過程によつて反對に説明され得るものでなければならぬ。果してリカード於ては、「(地代の騰貴と)同一の原則から次の事が起つて来る。即ち、地上に同一分量の資本を使用する事を不必要とし、従つて最後に使用される部分をして、より

生産的ならしむる所の、社會に於ける何等かの事情は、地代を低下するであらう。人口は、それを雇傭するための資金によつて、それ自らを調整する。それ故に、常に資本の増減と共に増減する。されば、資本の各減少は、必然的に穀物に對する有効需要の減少・價格の下落・及び耕作の減退を伴ふ。資本の蓄積が地代を騰貴せしむると反對の順序で、資本の減少は地代を低下するであらう<sup>(11)</sup>。」

此の説明に於ても、リカードは同様に Mills を假定して居る。「同一分量の資本を使用する事を不必要とし、從て最後に使用される部分をして、より生産的ならしむる所の何等かの事情」によつて、Cが減少し、從てPが下落する。その結果は明かである。PとSとの開きが小となり、Rが減ずる。

又、マルサスも、彼の地代増加の法則の反面を説明するに過ぎない。曰く、「他方には、地代の下落は常に必ず劣等地の放棄及び優良地の繼續的衰頹と非常に必然的に關聯して居る様に見えるであらう。しかも、それは貧窮と衰頹との明かなる表示たる原因、即ち減少せる資本、減少せる人口、劣悪なる耕作組織及び粗生々産物の低廉なる價格の自然的且つ必然的結果である<sup>(12)</sup>。」

「若しも生産物の價格に比較して生産手段がより高價となるならば、それは(生産)手段が比較

的稀少となつた事の明かな徴候である。而て、貧弱なる土地の耕作に於ける如く、多量の手段を要する場合には、その（生産）手段を獲る資力が不足し、従てその土地の使用は放棄せられるであらう<sup>(13)</sup>。」と。

即ち、マルサスは、 $P \parallel S$ なる前提から出發して、 $S$ の増加により、 $P$ と $S$ との差が小となり、従て $R$ が減少すると説明する。

之を要するに、マルサスもリカードも同一現象を説明したのであつて：根本的に何等の異見をも見出すことが出来ない。只、前者が $P \parallel S$ を、後者が $U \parallel P$ を前提として説明を進めたに過ぎない。兩者は共に同一法則の鮮明のために、地代の増減なる現象の本壘に向つて、その論歩を進めた事は否定すべからざる事實であると云はなければならぬ。

× ×

以上の理論的部分に於て述べて來た所は、説明を簡單ならしむるがために、豊度の差益地代を主として來た。勿論、地代はそこに本來の意義を有するのであるけれども、リカードもマルサスも俱に地代の觀念を擴張して、地位の差益地代・資本の差益地代に就いても、各々説く所がある。しかし、此の點に於ても固より兩者の間に根本的な見解の相違の存すべき譯がないのであるから、此

點について特に述べる必要を見ないであらう。

- (1) Malthus, Inquiry, p. 21.
- (2) *ibid.*, p. 22.
- (2) *ibid.*, p. 26.
- (4) *ibid.*, p. 27.
- (5) *ibid.*, p. 23.
- (6) (7) Ricardo, Principles, p. 54.
- (8) (9) *ibid.*, p. 55.
- (10) (11) *ibid.*, p. 56.
- (12) Malthus, Inquiry, p. 32.
- (13) *ibid.*, p. 33.

## 立場

### (F) 地代に對する觀念

既に論證された様に、リカードの地代理論はその本質的部分に於ては全くマルサスの理論を繰返したものであると云はなければならぬ。(此點に關しては尙後に述べるであらう。)

然れども、斯くの如く同一法則の支配の下に發生増加する地代に對して、マルサスとリカードとは如何なる觀念を抱いて居たか。吾々は今、此點の檢討の順序に在る。

マルサスはその著『研究』の卷頭に於て曰ふ。「アダム、スミスに従へば、地代は社會の三大階級が支持せられる所の富の三根源の一である。

エコノミストによれば……地代のみが富の名に相當し、且つ國家の租税を負擔する事を得、又租税が結局負擔せらるゝ所の唯一の資源であると考へられた(1)。」と。

斯くの如く、スミス及びエコノミストと同一の見地に立つマルサスの謂ふ所の「富は、價值の一般尺度の高低からではなく、生産物の分量から成り立つて居るものである(2)。」即ち、「地代は單なる名目上の價值でもなく、また國民の一階級から他の階級に向つて、不必要に且つ有害に移轉したる價值でもなくて、それは國民資産の全價值の中で最も眞實にして且つ本質的な部分であつて、自らの法則によつて、その土地の上に置かれたものである(3)。」此の最も本質的な部分の増加は、「富及び繁榮に伴ふ必然の結果であり、且つその最も確實なる標識である(4)。」斯くて「地代が凡ての力及び快樂の源泉であると云はれて來たのは至當である(5)。」

斯くの如く、マルサスは地代は國富の源泉であると觀念するが故に、「地主階級に就いて云ふ

と、彼等は前述の二階級(勞働者及資本家階級)の様に富の生産に活動的に貢献しないけれども、その利害關係は、より近く、より密接に國家の繁榮と關聯して居る<sup>(6)</sup>のである。

マルサスの此の見解に反對して、リカードは曰ふ、「地代は如何なる場合にも富の創造ではなく、それは常に既に作り出された富の一部分である<sup>(7)</sup>。」

「地代の騰貴は常に、國の富の増加しつゝある結果であり、又その増加せられたる人口に對して食物を供給することの困難な結果である。それは富の徵候ではあるが、決して富の原因ではない。何となれば、富は地代が靜止し或は尙低下しつゝある際に屢々最も迅速に増加するから<sup>(8)</sup>。」

故に「私は、農業上の改良によつて富の大量が創造されるであらうと云ふ事、及び社會の自然的進行に於てその富の多量が結局は地代の形をとつて地主の手に歸するであらうと云ふ事は認める。乍然、その事は何等地代が常に富の移轉であつてその創造でない」と云ふ事實を變更するものではない。——何となれば、それが地代として地主に支拂はれる前には、資財の利潤として繼續して來たに相違ない。そして、單により劣等なる質の土地が耕作されるために、その一部が地主に讓渡せられるに過ぎないものであるから<sup>(9)</sup>。」と。

斯くの如く、地代の増大を以て國富の源泉となすマルサスの意見に反對して、リカードは地代は

既に造られた富の移轉に過ぎない、即ち地代は利潤として繼續して來たものゝ中から支拂はれる事になるのである、と説く。茲に於て乎、利潤が吾々の注意を惹く特權を有する事となる。従つて、吾々は、次に、リカードの所得分配の機構を簡單にのべて、その機構の中に於ける地代・賃銀・利潤の關係を明かにするの必要を感ずる。

「地代と賃銀とは、富と人口との増加と共に、上騰する傾向を有する<sup>(10)</sup>」而て、「地代の貨幣價值に於ける上騰は、生産物の分前の増加を伴ふ。地主の貨幣地代がヨリ大になるのみならず、彼の穀物地代も亦さうなる<sup>(11)</sup>」しかし、「労働者の運命はより不幸であらう。成程、彼はより多くの貨幣賃銀を受けるであらう。が、彼の穀物賃銀は減少せらるゝであらう<sup>(12)</sup>」斯くの如くにして「地主と労働者とが支拂はれた後に、土地の生産物の殘餘の分量は必然的に農業者に屬し、而て彼の資本の利潤を構成する<sup>(13)</sup>」即ち、利潤は、自分自身に何等の自律的法則をも有しないものである。既に述べた様に、地代は價格形成に参加しないから、自己の中に自律的法則を有しない利潤は、必然的に賃銀に依存しなければならぬ關係に立つ。然るに、「人口の増加と共に、必需品は、生産にヨリ多くの労働を必要とするが故に、價格に於て騰貴するであらう<sup>(14)</sup>」故に、労働の貨幣賃銀を増加する所の穀物の價格に於ける騰貴は、農業者の利潤の貨幣價值を減少する<sup>(15)</sup>事となる。

上述せる所によつて、リカードの所得分配の機構は大體明かになつたが、リカードは、「利潤の此の(減少の)傾向は幸にも……農學上の諸發見によつて妨止せられて居る<sup>(16)</sup>。」と言ふ。即ち利潤減少の一般的力に反抗する所のものを以て幸福な事と認めたと故に、彼は『幸にも』と言ふ言葉を用ひたのであらう。之は何を意味するか？それは明かにリカードが利潤現象に關心を有しそれを中心として經濟理論を研究して居た事を物語るものである。と私は思ふ。

既に、地代の理論に關しては兩者俱にその主潮を一にする事を知つて居る吾々は、今や地代に關する觀念に於て、兩者がその觀る所を異にするのを發見した。是は、全く、マルサスがフイジオクラットの「自然は人間と俱に勞作する」と云ふ思想の所有者であつたがために、地代の増大を以て國富の源泉となし、只管に國富の大を致さんがために、地代の上騰を希つた論客であつたのに反して、一方リカードは近代の資本主義精神に眼醒めた所の論客であつたが爲に、只管に利潤の増大を喜び、此の利潤の中から地主に移轉されるものである所の地代の増加に對しては極力反對した事に依るものと觀て差支へないであらう。

斯くて、立場を相異にするリカードとマルサスは、必然的に、その地代に對する觀念を異にするが故に、兩者が俱に同一なる地代理論の根據から出發しながらも、尙、穀物關稅の問題に對して彼

等の抱懐した見解は必然的に相異なるものとならなければならなかつたのである。

- (1) Malthus, Inquiry, p. 1.
- (2) Malthus, The Grounds of an Opinion on the Policy of Restricting the Importation of Foreign Corn, p. 30.
- (3) Malthus, Inquiry, p. 20.
- (4) *ibid.*, p. 40.
- (5) *ibid.*, p. 16.
- (6) Malthus, The Grounds of an Opinion, p. 34.
- (7) Letters of D. Ricardo to Malthus, p. 59.
- (8) Ricardo, Principles, p. 54.
- (9) Letters of D. Ricardo to Malthus, p. 155.
- (10) Ricardo, Principles, pp. 78—79.
- (11) <sup>(12)</sup>*ibid.*, p. 79.
- (13) *ibid.*, p. 89.
- (14) *ibid.*, p. 78.
- (15) *ibid.*, p. 90.
- (16) *ibid.*, pp. 98. 99.

## 政 策

地代か？

利潤か？

その觀る所を異にしたが爲に、轉じて政策論に於て、マルサスは外國に頼る事の危険を論じたのに反して、リカードは穀物の自由輸入を以て利潤の増加・國運の發展を説く事となつたのである。

斯くて、地代理論を、經濟の領域から價值判斷の領域へ、換言すれば確乎たる物的事實の領域から多かれ少なかれ動搖不安なる意思や感情のそれへ移した。だから、彼等は自分の觀る所に從つて辯じ立てゝさへ居ればいゝのであつた(1)。

凡そ茲には採る可き立場が三個——地主階級の立場、資本家階級の立場、及び勞働者階級の立場——存在して居たのであるが、二人の論客はその政策に關する論争に於て、一は地主階級の利益のために、他は資本家階級の利益のために、夫々辯じ立てたけれども、残る一個の立場——勞働者階級の利益のために——は決して辯じ立てゝ呉れなかつた。即ち、彼等は「勞働者階級に對しては、共に有産者階級を擁護したものであることに變りはない(2)。」換言すると、兩者の政策論は共に有産者階

級の意識的表現であることには變りはない。斯くの如くマルサスもリカードも共に等しく労働者階級に對しては有産者階級の代辯者であつた事に於てその軌を一にするものであるが、有産者階級内部に於ては自由競争に基く利害の分裂を來し、一は地代の代辯者となり他は利潤の擁護者となつたのである。

資本家的生産方法が未だ初期の發展段階に在つたその當時に於ては、從來の封建的經濟組織の殘滓との關係上、即ち新興資本家階級と傳習的勢力を持つ封建的階級との對立が存在したため、労働者と資本家の兩階級の對立は明かに表面上に現はれなかつた<sup>(3)</sup>。即ち、勞資の對立は未だ峻しき尖鋭化を見るまでには發展して居なかつたのである。斯くの如き社會状態に在つては、資本家と地主との對立、即ち有産者階級内部の自由競争に基因する所の利害の分裂と言ふ事實が前景に現はれて居たが故に、マルサスとリカードとの論争も必然的に其の當時の地主階級と資本家階級との對立、即ち有産者相互間の自由競争に基く利害の分裂と言ふ事實を表示したものに外ならないと言はなければならぬのである。

- (1) Engels, Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft. S. 160. (林要譯『反テーリング論』p. 250.)
- (2) 住谷悦治『唯物史觀より見たる經濟學史』pp. 326—327.
- (3) 同上、P. 329.

(G) マルサスの保護貿易政策

マルサスは謂ふ、

「國家の現状に鑑みて、外國の穀物の自由なる輸入を制限する事は、賢明にして且つ政治政策的である様に、私には考へられる(1)。」と。

マルサスの穀物輸入制限論の根據は、一部分『穀物關稅並びに穀價騰落の農業並びに一般に國富に對する影響に關する諸觀察』の中に述べられて居る様に、國家の繁榮のために穀物の獨立なる供給をなさんとする意圖に出づるものであるが(2)、一部分は、恐らくは主として、輸入制限論者に『決定的貫目』を與へた所の其の當時發生した次の様な事實、即ち――

「第一に、現在の穀價の結果に關して議會に齎らされた報告書、並に現在に於ける經驗。

第二に、良好となつた吾國(英國)の外國爲替の状態。

第三に、而て主として、最近フランスに於て通過した穀物の輸出に關する實際的法律(3)――に存するのであつた。

マルサスが『諸觀察』に於て示さんとした事は、極めて貧弱なる土地を耕作から除外するか、又

は生産増加を主眼とする農業上の凡ゆる改良をば可成り永い間妨害するにあらざれば、穀物の価格の大下落は起り得ないと言ふ事であつた。此の原則は、議會の報告書によつて完全に確められた。而て、穀價大下落の結果及び物價下落の繼續は一國の農業に極めて激しい衝擊を與へ、農業資本に大損失を與へた(4)。

マルサスに従ふと、凡て一般的狀態の下に在つては、價格の下落は生産物の減少を伴ひ、生産物の減少は當然地代の減少を伴ふと言ふ事は、理論と經驗との指示する所である。それ故に、開港の結果として、眞實地代並びに名目地代の兩者を減少せしむる事は少しも疑ひのない所である(5)。

地主階級は、富の生産に活動的に貢献する所がないけれども、その利害關係は最も密接に且つ必然的に國家の繁榮と關聯して居て、一方の繁榮若くは窮乏は他方の繁榮若くは窮乏を意味する(6)と考へたマルサスは、地主階級の最も有力なる辯護者となつて穀物の輸入制限を主張したのである。

マルサスの説く所を聽くと、労働者階級は自由貿易の結果として賃銀を大いに低減せしめられ、物價の變動に甚しく支配せらるゝに至る(7)。然し輸入制限によつて生ずる穀物の高價は消費者としての彼等にとつて有害であると考へるのは、極めて短見である。「彼等がより良い生活をするために最も必要な事は、彼等の慎しみ深い習慣と労働に對して増加しつゝある需要とである(8)。」労働に

對する同一需要を充すためには、自己の生命の再生産に必要な價格が支拂はれ、それが生活必需品の一定量を支配し得なければならぬ。然し乍ら、「若しも彼等が一定量の生活必需品を支配する事が出来、且つ彼等(生活必需品)の上騰した價格に比例して労働の貨幣價格を受け取る事が出来るならば、穀物に比例して騰貴しない所の凡ての便宜品及び娯樂品——そのうちには、貧者の消費する様なものが澤山ある——に關して、彼等(労働者)の状態は最も著しく改善せられるであらう(9)。」

次に、資本の利潤によつて生計を立てる階級に就いて見ると、その大半は農夫或は農夫と密接な關係に在るものであつて、残りの四分の一位の人々は外國貿易に従事して居る(10)。前者、即ち「農夫に就ては言を費す必要を見ない。彼等は開港によつて非常に損害を蒙るであらうと言ふ事は疑の餘地がない(11)。」然るに、後者、即ち直接に貿易に従事して居る少數の人は「輸入制度の利害を感ずるであらう(12)。」

開港によつて疑もなく利益を享ける階級は、株主及び俸給生活者である。乍然、「彼等は其人數が少ないのみならず、彼等の利害關係は前述の諸階級殊に労働者階級及び地主の様に國家の厚生に密接な關係を有するものではない(13)。」

斯くの如く、四個の階級が開港即ち自由貿易によつて影響せられる所を考へると、「人民、殊に一國の精勵なる階級の大多數は利するよりも傷はれる方が遙かに大いのである<sup>(14)</sup>。」故に、「歐洲の現状、並びに吾國の現在の地位の實際的事情の下に於ては、吾國自身の必要とする穀物の平均的供給を自ら耕作する事が最も賢明なる方法であると私は確信する。而て、さうする事によつて、一國が人口・力・富及び幸福の大なる繼續的増大に對する豊富なる源泉を有する事が納得せられる、と私は思ふ<sup>(15)</sup>。」と、マルサスは結論して居るのである。

- (1) Malthus, The Grounds of an Opinion on the Policy of Restricting the Importation of Foreign Corn. p. 42.
- (2) Malthus, Observations on the Effects of the Corn Laws, p. 16.
- (3) Grounds, p. 3.
- (4) *ibid.*, pp. 3. 4.
- (5) *ibid.* p. 34.
- (6) Malthus, Principles of Pol. Economy. p. 204. p. 225. Grounds. p. 34.
- (7) Grounds. p. 29.
- (8) Inquiry into the Nature and Progress of Rent. pp. 47—48.
- (9) *ibid.*, pp. 48—49.
- (10) Grounds. p. 29.

- (11) *ibid.*, pp. 29—30.
- (12) *ibid.*, p. 30.
- (13) *ibid.*, pp. 36—37.
- (14) *ibid.*, p. 42.
- (15) *ibid.*, pp. 47—48.

### (H) リカードの自由貿易政策

地代の上騰に反對するリカードの立場に立つて考へると、若しも穀物の自由なる輸入によつて穀價が下落するか、又は其の價格のより以上の騰貴を阻止するならば、其の場合不利を蒙るのは獨り地主階級のみである。所が、此の地主階級の利害は常に他の凡ゆる社會階級の利害と相反する。彼等の地位は穀物が少量で高價な時に最も隆盛であるのに反して、凡ゆる他の人々は穀物を廉價に獲得する事によつて利益を享けるのである(1)。

戰時中に於ける穀物の高價從て地主階級の特別に有利なりし地位に戀々とする地主連中の穀物の高價必要論を目するに、リカードは一の人爲的穀價維持策に過ぎずとなし、極力之に反對し、自らは穀物の自由なる輸入を唱導し、斯くする事によつて、劣等地の耕作から免れ、穀價を低落せし

め、利潤を上騰せしめ、資本を蓄積して、富の大なる生産を希求したのである。

リカードに従ふと、資本と人口とが増加して、一層多量の穀物が必要となるにも拘らず、穀物を外國から自由に輸入する事が制限せられるならば、吾々は増大しつつある人口を養ふために、一層劣等なる土地を耕作するか、又は同一の土地により大なる分量の資本を使用する事を強ひられる。何となれば、それはイギリスの人口に必要な穀物を獲得するための条件であるからである。此の場合、穀價は騰貴し、斯かる騰貴と共に以前から耕作を繼續して來た所のより、良き土地の地代は必然的に増大し、從て土地に使用せられたる最後の資本部分の利潤は低下し、延いて一般利潤も亦低下を來さざるを得ない(2)。「しかし、此のより高い價格は決して望ましいものと考へらるべきではない、——若しもより少ない労働を以て同一の收穫を擧げ得たならば、それは存在しなかつたであらう——若しも労働を製造業に充當する事によつて、吾々が之等の製造品を輸出して之と交換に間接に穀物を獲得したならば、それは存在しなかつたであらう(3)。

斯くの如く、最劣等地の耕作を餘儀なくせられ、之を放棄し得ざる限り、リカードの考によると、農業利潤は上昇し得ない。「利潤は、食物の價格に、寧ろ食物の價值に依存する。如何に商品が稀少であつても豊富であつても、食物の生産を容易ならしむるものは何れも利潤率を高めるであ

らう。反之、食物の分量を増大する事なしに、生産費を高めしむるものは何れも、如何なる事情の下に於ても、一般的利潤率を低下するであらう(4)。」斯くて、「利潤低下の程度は一に生産費の増加に依存する(5)」のである。それ故に、農業利潤を上昇せしめんがためには、穀物を自由に輸入するか、又は農業上の改良を施すに如くはない。とリカードは主張する。

従て、穀物の輸入を制限する事は農業上の改良を妨壓する事と同一である、と彼は論ずる、——「低廉なる價格での穀物輸入から起ると思はれる所の利益の凡てをば吾々から奪ひ去る可く吾々を運命付けるに足る程しか程左様に地主の利益が重要であるならば、それは又農業上の凡ての改良及び農具の凡ゆる改良を排斥すべく吾々を動かすであらう。何となれば、斯かる改良によつて、穀物がより安くなり、地代が減少し、而て地主の納税能力が尠くとも一時的には減少する事は、穀物の輸入によると同様に確實な事であるからである。——論理的であるが爲には、同一の法則に従つて、吾々をして改良を中止せしめ、且つ輸入を禁止せしむべきである(6)。」

されど、リカードは『事物の自然の成行き』の結果として、地代が騰貴し利潤が下落する様な事のあるのは已むを得ない事である事を認めて、「高い地代と低い利潤とは、不斷に相伴ふものであるから、それが事物の自然の成行きの結果である限り、決して不平を言ふべき事柄ではない(7)」と

言つて居る。たゞ、彼は穀物關稅の如き人爲的方策によつて社會全員の利益を犠牲にして地主の特殊なる利益を擴大する事を默過し得ずして、「或る特定階級の利益を尊重して一國の富と人口との増進を阻害せしむる事を大いに遺憾とする<sup>(8)</sup>」と言つて穀物の自由貿易を強調した。けれども、リカードは、英國のその當時の状態に於ては一舉にして徹底的に輸入制限を撤去する事は無鐵砲であり冒險的であると信じて、「農業に對する一切の不當なる保護をば漸次に取除かん<sup>(9)</sup>」としたのであつた。

- (1) Low Price of Corn. p. 235. Principles. pp. 321. 322.
- (2) Low Price of Corn. p. 231. P. 237. p. 261.
- (3) On Protection to Agriculture. p. 261.
- (4) Influence of a Low Price of Corn. pp. 239—240.
- (5) Low Price of Corn. p. 231.
- (6) Influence. pp. 252—253.
- (7) Low Price. p. 235.
- (8) Influence. p. 252.
- (9) On Protection. p. 306.

## 結 論

### (I) 結論的説述

凡て在るが儘に純粹に考察して來た所の如上の所論を翻つてみると、リカードの差益地代論は其の本質的部分に於てマルサスのそれを繼承せるものに外ならない事を知る。リカード自身もそれが決して彼の獨創でない事を明らかに認め、『穀物の低い價格が資財の利潤に及ぼす影響』に於て、「地代の起源及び増進に關して私の述べた所の總てに於て、私はマルサス氏が同一主題に關して其の『地代の性質及増進に關する研究』に於て極めて巧妙に設定した原理をば、たゞ簡單に繰り返し且つ説明せんと努めた<sup>(1)</sup>」と述べ、且つ「彼(マルサス)の出版物に負ふ所が極めて大である<sup>(2)</sup>」と告白して居る。

尙、又その『經濟原論』の序文に於ては、「一八一五年マルサス氏はその『地代の性質及増進に關する研究』に於て、またオックスフォード大學々士會員(ウエスト)はその『土地に對する資本の投下に關する論文』に於て、殆んど同時に地代の眞の學説を世に發表した」事を述べたるのみならず、更に最終の第三十二章の初めに於て曰く、「マルサス氏は地代の原理を充分に説明し、而て

それによつて以前には全く分らなかつた所の、或は極めて不完全に分つて居た所の、地代の問題に關する多くの難點を、大いに了解し易くした(4)」と。

又、リカードは、マルサスに與へた書翰の中に於て述べて曰く、

「今、私は、將來の議論に對して主題を提供する所の各句を撰擇するの意圖を以つて、地代の騰貴増進に關する貴下の論文を非常に注意して讀み終つた所である。その中に於ける主要なる原理は凡て私の完全なる同意を博する事、及びそれは常に地代に關聯して重要であるのみではなく、又租税の如き他の多くの難問に關聯しても亦重要なる所の多くの獨創的見解を含んで居るものと私は思ふと云ふ事を述べても決して賞め過ぎではないのである(5)」と。

斯くの如く到る處に於て、吾々はリカードがマルサスの理論に同意を表して居るのを見出す。これ程明かな證據はあるまい。此の間の消息を知る人々は、マルサスの地代理論を輝かしい光の下に持ち來らすに相違ないであらう。

ポーナー曰く、

「マルサスは正しく英國に於て地代に關する經濟說を明瞭に解決した最初の人であると考へらるる。……」

一八一五年ウエスト及びマルサスに依つて成された地代に關する眞の學說の同時再發見は、恰も一八五九年ウォーレス及びダーウキンに依つてなされたダーウキン說の同時發見と對比する事が出来るであらう(6)。」と。

又、マルサスの『地代の性質及増進に關する研究』を目して、「全く完全な全く新しい地代の理論を、最も名聲ある國民經濟學の著者の見解に於て保つ所の小さな本の」と爲すレーザは云ふ、

「斯くの如くにして、マルサスは穀物の價格の解剖によつて、地代の説明を完全に論じ盡した。後繼者達は此の問題の理論的方面に關しても、將また前例の完全なる分析に關しても、此の記述に何物をも附け加へる所がなかつた。天才の業績は、一個の全く改變せられた觀察を齎らす——それは、地代に關してはマルサスの享くべき榮譽である。一度、斯かる完全明瞭なる觀念が表現せられ、それが知れ互ると、その觀念は須臾にして、其の凡ゆる可能的結果に於て研究せられると云ふ事は、誤り得ない所である。同じ様な優秀な才能を有する人が、此の殘された課題を採るならば、その時にはたゞその發展をより迅速に且つより豊富に結果しなければならぬのみである(8)。」と。

此の任務を果したものが、正しくリカードである。即ち、リカードが抽象的演繹的觀照の方法によつて、マルサスの理論の不備を補ひ、曖昧を除き、以て錯綜せる理論の起伏を平坦ならしめたと云

ふ功績を認めるのに吝ではない。然れ共尙私は如上の論證によつて、近代的差益地代の眞の發見者はマルサスであるとの私の結論は正當に承認せられなければならない、と確信するものである。

惟ふに、「A. Smith から G. Schmoller に至る迄、經濟學は人生に對し正當なる經濟政策を指示し得べく又之を指示するを以て其使命となすてふ根本見解に就いては學者間殆んど異論なく、只何を此正當なる政策なりとなす可きやと云ふ末節に刃を交ふるのみ」であつた。その例にもれず、マルサスとリカードとは、地代理論に於ては同一原理を根底に置きつゝも尙、立場を異にしその價值判斷を異にしたがために、穀物の輸入問題に對しては、その意見を異にし、爲に、赤き Sollen の炎は青き Sein の色を焼きつくさんとするが如き時勢の中に生活して居たのである。従て、理論は政策の備兵たるの奇觀を呈して居たのに何の不思議もない。されど、政策的價值から理論の價值を判斷するが如き事は許されないことである。此の限りに於て、マルサスの地代理論により、大なるより、強き輝きを與へて人々の注意を喚起する事は、正に吾々の爲すべき任務でなければならぬ。

想へばマルサスの地代理論は餘りにも大きな彼の人口論の光の下に隠され過ぎて來た。世には往々にして眞の發見者であり乍らその信認を得ない人がある。不遇なるマルサスの地代理論は、リカードの地代理論によつて、其の光を蔽はれて來た。それは、抑々如何なる原因に基くかと言ふ事

を考へる時、「マルサスが近代的地代理論の發見によつて獲得した所の不朽の功績が後に至つて薄くせられたのは、双面的原因に歸せられる。一方に於ては、地代に關するマルサスの固有の説明が本源的文體に於て知られて居ないで、彼の『原論』の中に入り込んだ所の後の墮落せる形式に於て知られて居る。が、その他に、到る處に於て論戰の目的の爲にのみ異別なる意見を細密に研究して居るリカードの主著の外に、マルサスを極めて慇懃な仕方考へて居る所の同一著者のそれ以前の著書が看過せられて居る<sup>(10)</sup>。」と言ふレーザの言葉の中には、想ひ當る節々が極めて多いであらう。

誠に、マルサスが『地代の性質及び増進に關する研究』を世に問ふたのは一八一五年の初めてであつたが、パンフレットの形式を以てなしたが爲に散佚し、後世の人は其れを手にする事が困難なために、その存在すら知らぬ人が多い。然るに、リカードの有名なる『經濟原論』は一八一七年に出版せられ、マルサスの餘り有名でない『經濟原論』は一八二〇年に世に現はれた。従て、マルサスの『地代の性質及び増進に關する研究』の内容を知らぬ人は、リカードの地代理論をマルサスが一八二〇年の『經濟原論』の中に於て繼承して居るに過ぎないと言ふ風に全く正反對に考へる事もあり得べき事である。斯様な考の所有者は是非一度マルサスの『地代の性質及び増進に關する研究』

と言ふ表題の「小さいけれども非常に内容の豊富な著作(II)」に眼を通して貰ひたい。

私が事物に關する見解に惑はさるゝ事なく、事物其物の研究に没頭する時、即ちマルサス及びリカードの地代に關する理論を展開して居る所の彼等自身の諸種の原本に就いて研究の歩を進める時、私は必然的に如上の見解に到達せざるを得ないのである。

- (1) Ricardo, Influence of Low Price. p. 230. note.
- (2) *ibid.*, p. 223. (Introduction)
- (3) Ricardo, Principles, p. 1.
- (4) *ibid.*, p. 392.
- (5) Letters of D. Ricardo to Malthus. pp. 58—59.
- (6) Bonor, Malthus and his Work. pp. 221—222.
- (7) Leser, Untersuchungen zur Geschichte der Nationalökonomie. S. 90.
- (8) *ibid.*, S. 110—111.
- (9) 大西猪之助「囚はれたる經濟學」p. 52.
- (10) Leser, Untersuchungen z. Geschichte d. N. Ö. S. 121.
- (11) *ibid.*, S. 91.

—(一九二五・一二・於仙臺)—  
—(一九二七・九・於東京)—

〔附記〕 本稿は、二年前に完了したものを、東京市外世田谷なる野砲兵第一聯隊に於て一年志願兵として『血税』を支拂ひつゝある間に、書物の参照に事缺き、一種獨特なる兵營の喧騒に妨げられつゝも尙、斷片的なる寸暇を見出して、訂正したものである。従て、多少の不備は免れないであらう。しかし、原稿締切の九月卅日には、私も除隊して、大手を振つて街を歩ける身分になれるのであるから、又そのうちには幾らか優つたものを書く日もあるであらうと言ふ事を樂しみにして居る様な次第である。